

『日本アジア研究』第11号(2014年3月)

連体修飾節の形容詞的用法と「結果継続」

蔡 梅花*

本稿では、形容詞的用法にもアスペクト的用法にもなれる動詞を対象に、「変化の結果継続」の意味に注目し、これらの動詞が共通して持っている特徴を探ることを目的とする。

対象にした動詞を「非典型的な形容詞的動詞」と名付け、〈主体動作・客体変化動詞〉〈主体変化動詞〉〈主体動作動詞〉に分類した。それから、〈主体動作・客体変化動詞〉の考察を通して立てられた「形容詞的用法になりうる動詞は、主体もしくは客体に結果を残す動詞でなければならない」という仮説が、〈主体変化動詞〉と〈主体動作動詞〉にも当てはまるのかを検証した。

結果、次のようなことが明らかになった。

1. 〈主体動作・客体変化動詞〉と〈主体変化動詞〉は形容詞的用法になりやすい。これは、主体の変化であれ客体の変化であれ、変化を含意する動詞は、「変化の結果継続」という〈2 次的状態〉を表すことができることから、形容詞的用法になりやすいと考えられる。
2. 〈主体動作動詞〉は形容詞的用法になりにくいだが、「押す」のような結果が主体に認識されやすい形で残る動詞は形容詞的用法になりうる。
3. 「非典型的な形容詞的動詞」の形容詞的用法は「タ」形と「テイル」形両形式が使われる。同じ事態を2つの異なる形式で表すことは、主体が客観的事態のどの部分を焦点化して捉えているかという認識が関わってくると考えられる。

キーワード：形容詞的用法，変化の結果継続，動作の完了

1 はじめに

日本語には、形容詞的用法と呼ばれるものがある。形容詞的用法とは、連体修飾節の「タ」形と「テイル」形がテンス・アスペクトを表さない用法である。例えば、

- (1) 走った人≠走っている人
- (2) 曲った道=曲っている道

(1) の「タ」形は「過去」または「完了」の意味を表し、「テイル」形は「動作の継続」の意味を表すので、「走った人」と「走っている人」は違う意味を表している。しかし、(2) の「タ」形は「過去」も「完了」の意味も表さず、「テイル」形も「動作の継続」の意味を表さない。「タ」形と「テイル」形は、動作や作用を表さず、道が最初から「曲がっている」状態にあることを表して

* サイ・バイカ、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程、日本語学

いる。こういう (2) のような用法が形容詞的用法である。

日本語の動詞の中には「走る」のように連体修飾節の「タ」形と「テイル」形が違う意味を表す動詞と「曲がる」のように「タ」形と「テイル」形で同じ状態を表せる動詞が存在する。「曲がる」のように、形容詞的用法になりうる動詞は限られていて、すべての動詞に起こるわけではない。

形容詞的用法は、ものの状態を表しているが、状態には (2) のような変化を伴わない状態と変化を伴う変化後の結果継続の状態がある。本稿では、この「変化の結果継続」の意味に注目して、「形容詞的用法になりうる動詞は、主体もしくは客体に結果を残す動詞でなければならない」という仮説を検証することを目的とする。

2 先行研究

アспектに関する研究は、金田一 (1950) の「国語動詞の一分類」を出発点とし、数多くある。その中で、金田一 (1955)、寺村 (1984)、金水 (1994) で動詞の特徴をどのように記述しているのかを見ていくことにする。

2.1 金田一 (1955)

金田一 (1955) は、「テイル」形が述定¹で動作や作用を表さず、アспектの意味を表さない場合を「単純状態態」²と呼んでいる。

(3) この道は曲っている。(金田一 1955→1976 : p.45)

(3) の「テイル」形は、道が「非・真直」という状態を「曲る」という語で表している。いわば形容詞的な意味を表しているが、これが金田一の「単純状態態」である。こういう例はほかにもある。

(4) 山が後に聳えている。(p.45)

(5) 秀吉の顔は猿に似ている。(同上)

これらの「単純状態態」が連体修飾節になった場合「タ」形になるのが特徴で、この「タ」形と「テイル」形はテンス・アспектの意味を表さなくなる。

(6) 聳えた山＝聳えている山 (p.46)

(7) 猿に似た顔＝猿に似ている顔 (同上)

金田一 (1955) は、形容詞的用法の例を挙げているだけで、どういう動詞が形容詞的用法になるかについては書いていない。

¹ 文の最後に来る用法。

² 「道が曲っている」の「曲っている」全体は、ある状態にあることを表している。このような、現象の起こりと終わりということを考えずに、ある状態にあることを表す形を「単純状態態」と言う。

2.2 寺村 (1984)

寺村 (1984) は、形容詞的動詞³の「テイル」かどうかを判定するテスト方法を挙げている。その認定方法は、「1 つは、基本形の用法、過去形の用法が考えられるかどうかということで、考えられない場合は形容詞的用法である。そしてもう 1 つは、連体修飾で「タ」という形になるのが普通で、その「タ」形には、「過去」の意味も、「完了」の意味も感じられない、ということがあるかどうかである。そのテストに通るものは、形容詞的動詞のテイルと考えてよい」(p.140) というものである。寺村 (1984) の例を挙げる。

- (8) a. この作品は優れている。(p.141)
 b. *この作品はやがて優れる。
 c. *この作品は去年いちばん優れた。
 d. ?優れている作品の持つ力は……
 e. 優れた作品の持つ力は……
 (→a. は形容詞的)
- (9) a. いい匂いがしている。(同上)
 b. やがていい匂いがするはずだ。
 c. その時、なんとも言えぬいい匂いがした。
 d. いい匂いがしたブランディー
 (さつきあんなにいい匂いがしたブランディーが)
 (→a. はアスペクト的)

(8) の「優れている」は形容詞的用法で、(9) の「匂いがしている」はアスペクト的用法である。つまり、寺村の認定方法に従ってテストして見ると、「優れる」は (8) の b, c が言えないことから基本形と過去形の用法がないと考えられる。また、連体修飾節になった時、(8) e の「タ」形は「過去」も「完了」も表さないことから形容詞的用法であると判定できるということであると考えられる。

寺村 (1984) も、形容詞的動詞の判定方法は挙げているが、形容詞的用法になる動詞の特徴については書いていない。

2.3 金水 (1994)

金水 (1994) は、「～タ」形の連体修飾節において、形状動詞⁴を構造的形状動詞と語彙的形状動詞に分けている。構造的形状動詞は、動詞の語彙概念構造に作用することによって派生され、結果の状態を「焦点化」するものである。例えば「ゆでた卵」を例にとると、時制的解釈と属性的解釈の構造は次のようになる。

時制的解釈：[〈動作主〉 〈対象〉 ゆでた] 卵
 属性的解釈：[〈結果〉 〈対象〉 ゆでた] 卵

³ 金田一 (1950) の「第 4 種の動詞」である。

⁴ 形容詞的な意味を持っていて、連体修飾では「～タ」、述定では「～テイル」または「～テアル」で現れる述語を、「～タ」、「～テイル」、「～テアル」を含めた形で「形状動詞」と呼んでいる。

このように、本来の動作主役割が剥奪され、状態性となって属性を表すようになる、構造的形状動詞になると言う。

金水（1994）によれば、構造的形状動詞の形容詞的用法には、主語が現れないこと⁵と、動作主の心中や動作の様態を描写する様態副詞と共起した場合、形容詞的解釈が阻止されるもの⁶とそうでないもの⁷があり、それは結果の状態への関与の強さによって相対的に決まること、つまり、動詞を修飾する副詞が結果の状態に強く関与していればいるほど、形容詞的解釈が容易になると言う。

また、語彙的形状動詞を金田一の「第4種の動詞」を中心に分類している。語彙的形状動詞は、動詞自体がほぼ形容詞的用法専用であり、元々出来事の意味を持たないものと、元の動詞は出来事を表す動詞的用法を持つが、形容詞的用法の方が、結果の状態を「焦点化」することによって直接派生されたものではないものに分けられる。

- 金田一の第4種動詞
 - a. 漢語＋スル：冷暖房を完備した施設
 - b. 様態副詞（擬態語・擬声語を含む）＋スル：べとべとした肌触り
 - c. 身体部分または形状を表す名詞＋ヲ＋スル：青い目をした人形
- 第5種動詞⁸
 - 存在や関係などの状態的な意味しか持たない動詞：関連した事件
- 結果の状態の固定とずれ、熟語的なもの
 - 基本的には動詞の用法があり、形容詞的用法は構造的に派生される動詞：鳥に似た味
- 連体詞的の形状動詞
 - 連体修飾用法だけあって、述定用法を欠く場合：あきれた事件
- 副詞的・後置詞的の形状動詞
 - 本来はテ形の副詞または後置詞が連体修飾形として「～タ」の形をとるもの：外務省を通じた折衝

金水（1994）は、語彙的の形状動詞を細分し、「結果の状態の焦点化」により形容詞的解釈が基本的に可能であることを指摘している。金水（1994）の語彙的の形状動詞と構造的の形状動詞は、寺村（1984）の典型的な形容詞的動詞と形容詞的動詞のように使える動詞の種類に当たる。本稿の3節で行う動詞分類は、寺村（1984）と金水（1994）に負うところが大きい。

以上、形容詞的用法に関する先行研究を概観した。金田一（1955）、寺村（1984）、金水（1994）は、形容詞的用法の用例を挙げているだけで、形容詞的用法になりうる動詞に共通する特徴については言及していない。

本稿では、形容詞的用法にもアスペクト的用法にもなりうる動詞を対象に、それらの動詞が共通して持っている特徴を探る。

⁵ 例：太郎がゆでた卵（金水 1994 : p.33）

⁶ 例：いやいや帽子をかぶった男（金水 1994 : p.50）

⁷ 例：じっくり煮込んだシチュー（金水 1994 : p.51）

⁸ 第4種動詞と存在動詞との中間的性質を持った動詞群。

3 形容詞的用法の判定基準

本稿では、以下のような方法で連体修飾節の「タ」形と「テイル」形がテンス・アスペクト的用法か形容詞的用法かを判定する。

まずは、時間副詞と完了を表す副詞との共起から「タ」形のテンス・アスペクト性を判定する。

- (10) 先日掛けたサングラスは高いものだ。(過去)
- (11) どれもすでに見た映画ばかりだ。(完了)
- (12) *先日尖った鉛筆を使う。(形容詞的用法)

次は、様態副詞との共起から「テイル」形が「動作の継続」のアスペクト的意味を表すか否かを判定する。

- (13) 雨がザーザー降っている音が聞こえる。(動作継続)
- (14) *激しく尖っている鉛筆を使う。(形容詞的用法)

最後は、結果副詞との共起から「テイル」形が「変化の結果の継続」のアスペクト的意味を表すか否かを判定する。

- (15) こなごなに割れているお皿 (結果継続)

このように、「過去」、「完了」、「動作の継続」の意味を表す「タ」形と「テイル」形を排除していく方法を取れば、出来事の開始時点と終了時点の問題にしない形容詞的用法を判定することができると考えられる。

4 形容詞的用法による動詞分類

4節では、連体修飾節の「タ」形と「テイル」形が、テンス・アスペクト的対立があるか否かで動詞を3分類する。連体修飾節でいつも形容詞的用法になる動詞を「典型的⁹な形容詞的動詞」とし、形容詞的用法にならない動詞を「状態動詞」とする。形容詞的用法にもアスペクト的用法にもなる動詞を「非典型的な形容詞的動詞」とする。

動作と変化を表す動詞の多数が「非典型的な形容詞的動詞」に属している。また、結果が主体と客体のどちらに残存しているかを検証するため、「非典型的な形容詞的動詞」をさらに〈主体動作・客体変化動詞〉、〈主体変化動詞〉、〈主体動作動詞〉に細分する。動詞全体の区分を表1にまとめた。

⁹ 寺村 (1984) の「典型的」とは区別して使う。

表 1 動詞全体の分類

形容詞的用法になる	典型的な形容詞的動詞	漢語＋する	完備する
		様態副詞＋する	ザラザラする
		身体部分または形状を表す名詞＋を＋する	青い目をして いる
		述定でいつもテイルの形をする	優れる
形容詞的用法になる・ならない	非典型的な形容詞的動詞	主体動作・客体変化動詞	切る，買う
		主体変化動詞	腐る，着る
		主体動作動詞	走る，動かす
形容詞的用法にならない	状態動詞		ある，いる

4.1 典型的な形容詞的動詞

表 1 に挙げた動詞以外にも以下のような典型的な形容詞的動詞がある。

典型的な形容詞的動詞：

- (a) 漢語＋する：精通する，完備する，など
- (b) 様態副詞（擬態語・擬声語を含む）＋する：
 - ・堂々（悠々，飄々，淡々，黙々，超然，など）としている
 - ・ザラザラ（イキイキ，ガサガサ，ツルツル，コリコリ，ゴミゴミ，ベトベト，アッサリ，しっかり，ヒンヤリ，など）している
- (c) 身体部分または形状を表す名詞＋を＋する：
 - ・（高い鼻，青い目，など）をしている
 - ・～ナ形（色，様子，顔，顔色，など）をしている
- (d) 有り触れる，おもだつ，優れる，ずばぬける，聳える，つりあう，尖る，馬鹿げる，面する，似る，など

(a) ～ (d) の動詞は，寺村（1984）の形容詞的動詞と金水（1994）の語彙的
形状動詞をまとめたものである。

4.2 非典型的な形容詞的動詞

典型的な形容詞的動詞が動作，作用を表さず，形容詞的用法になるのは，その動詞が過程を表さない物事の性質や状態を表す形容詞に似ているからである。そうすると，過程を表す動詞は，形容詞的用法にならないのかというと，過程を表す動詞も形容詞的用法になる場合がある。それは，文脈によって決まるが，これらの動詞は，言わば寺村の「形容詞的動詞のように使える動詞」で，本稿で言う「非典型的な形容詞的動詞」である。

「非典型的な形容詞的動詞」に「テイル」を付けた時，如何なるアスペクトの意味を表すかを表 2 にまとめた。

表 2 非典型的な形容詞的動詞の下位分類（工藤 1995 : pp.71-72）

非典型的な形容詞的動詞	動詞	「テイル」を付けた時のアスペクト的意味
主体動作・客体変化動詞	開ける, 折る, 消す, 倒す, 曲げる, 入れる, 並べる, 抜く, 出す, 運ぶ, 作る, など	動作継続—能動 結果継続 結果継続—受動
主体変化動詞	行く, 来る, 帰る, 立つ, 並ぶ, 開く, 折れる, 消える, 曲がる, 入る, 出る, 太る, 就職する, など	結果継続
主体動作動詞	動かす, 回す, 打つ, 蹴る, 押す, 食べる, 見る, 言う, 歩く, 泳ぐ, 走る, 泣く, 飛ぶ, 揺れる, など	動作継続—能動・受動

表 2 に示している動詞の「結果継続」というのは、変化が完了した後の結果が続いている状態を表しているので、「状態」として認識可能である。金田一（1955）が形容詞的用法を「単純状態」と呼んでいるように、「テイル」の 2 つの意味の中から「状態」と捉えられる「結果継続」が、果たして形容詞的用法になれるか否かの検討が必要である。

以下、〈主体動作・客体変化動詞〉、〈主体変化動詞〉、〈主体動作動詞〉の連体修飾節の「タ」形と「テイル」形を具体的に見ていくことで、形容詞的用法になる動詞の特徴を考察する。

5 形容詞的用法を持つ動詞の特徴

5.1 で、〈主体動作・客体変化動詞〉の「タ」形と「テイル」形が、時間副詞と様態副詞、結果副詞との共起が可能か不可能かを検討し、その結果を仮説として立てる。

5.1 主体動作・客体変化動詞の場合

主体動作・客体変化動詞はすべて他動詞で、主体の観点からは動作を表し、客体の観点からは変化を表す。このグループの動詞は、客体の変化が達成された時点で主体の動作が必然的に終了する特徴を持っている。主体動作・客体変化動詞は、〈客体の状態変化・位置変化を引き起こす動詞〉と〈所有関係の変

表 3 主体動作・客体変化動詞の下位分類

主体動作・客体変化動詞	動詞
客体の状態変化・位置変化を引き起こす動詞	<ul style="list-style-type: none"> ・折る, 切る, 殺す, 染める, 煮る, 曲げる, 割る ・入れる, 隠す, 繋ぐ, 塗る, 挟む, 混ぜる ・落とす, 刈る, ちぎる, 取る, 外す, むしる ・集める, 移す, 降ろす, 届ける, 運ぶ, 戻す ・築く, こしらえる, 建てる, 作る
所有関係の変化を引き起こす動詞	<ul style="list-style-type: none"> ・上げる, 預ける, 売る, 買う, 貸す, 借りる, 払う, もらう, やる

化を引き起こす動詞)に下位分類される(工藤 1995 : pp.73-74)。

以下、主体動作・客体変化動詞が連体修飾節に現れた時に如何なる条件を満たせば形容詞的用法になるのかを見ていくことにする。

5.1.1 形容詞的用法にならない場合

5.1.1.1 「過去」を表す時間副詞との共起

「過去」というのは、発話時を基準にしてそれ以前のことを表すので、〈発話時以前〉を指し示す時間副詞と共起可能である。「過去」を表す時間副詞には「昨日、さっき、先日、前日、先週、去年、昔」などがある。連体修飾節の「タ」形が「過去」の意味を表すかを判定するためには、「過去」を表す時間副詞との共起が可能か否かで判断できる。(16)、(17)は、主体動作・客体変化動詞が「過去」を表す時間副詞と共起した用例である。

- (16) 日本では四半世紀前に姿を消した明治のチョコレート入りビスケット菓子「こんにちはパンダ」が、東南アジアで売れている。(朝日新聞 2013.02.10)
- (17) 「先週、あなたが出した企画のことで至急、相談したいんだけど」いつもの祐子らしい、せかせかとした声だった。(月がくれた愛人)

(16)、(17)の「タ」形は、過去を表す時間副詞との共起から「過去」の意味に捉えられる。(16)、(17)のように、連体修飾節の「タ」形が「過去」の意味を表している時は「テイル」形と置き換えることができない。こういう「タ」形は、テンスを表しているため、形容詞的用法ではないと言える。

5.1.1.2 様態副詞との共起

仁田(2002)によると、動きの様態副詞には、〈動きの勢い・強さ〉¹⁰〈動きの早さ〉¹¹〈動きの質・様〉¹²を表すもの¹³がある。

(18)、(19)は、主体動作・客体変化動詞が様態副詞と共起した用例である。

- (18) お店の大きい鍋でグツグツ煮ている馬肉の煮込みもおいしかった。(Yahoo!ブログ)
- (19) コナンの背丈では上で何をやってるのか見えそうで見えないのだ。なにかザクザク刻んでいる音は聞こえていたが……(夜更け)

(18)、(19)は、様態副詞が主体の動作を修飾している用例で、連体修飾節の「テイル」形は「動作継続」の意味を表す。それは、様態の副詞は、動きの展開過程に内属する側面のありように言及することによって、動きの実現のされ方を限定し特徴付けるからである。「動作継続」を表す「テイル」形は、「タ」

¹⁰ 動きの有する力学的なエネルギー量に関わるもの(仁田 2002 : p.84)。

¹¹ 動きが展開していく時間的早さ・速度を表しているもの(仁田 2002 : p.101)。

¹² 動きの展開に伴って動きに生じる視覚・聴覚を中心にした形態・様子的なありようである(仁田 2002 : p.113)。

¹³ 動きの勢い・強さを表すもの：「激しく」「厳しく」「猛烈に」「軽く」「弱く」
動きの早さを表すもの：「ゆっくりと」「早く/速く」「急いで」「すばやく」
動きの質・様を表すもの：「カンカン」「ゴロゴロト」「ウンウン」「ゲラゲラ」

形と置き換えることができない。

5.1.2 形容詞的用法になる場合

5.1.2.1 「完了」を表す時間副詞との共起

「完了」は、「事態が全部終わること」を表しているので、「もう、すでに、とっくに」という副詞と共起可能である。「もう、すでに、とっくに」は、想定された事態があり、当該事態が、その想定事態が時間の中で展開し、その後に出現した事態として差し出される時に使う副詞である。「もうご飯を食べた」を例にとると、想定された事態——「食べていない」事態があり、当該事態——「食べた」事態は、「食べていない」事態が終わった後に出現した事態として差し出される。

(20), (21) は完了を表す時間副詞と共起した主体動作・客体変化動詞の用例である。

- (20) PDF 作成と言っても、ワードやエクセルのように一から文章や表を作るわけではなく、すでに作ったファイルを PDF に変換するのが一般的だ。(朝日新聞 2008.10.20)
- (21) すでに切った野菜が冷蔵庫に入っていたのであとは煮るだけで楽なのです。(Yahoo!知恵袋)

(20), (21) の連体修飾節の「タ」形が「完了」の意味を表すか否かは、否定形式との対応関係から判定できる。(20) の「すでに作った」の否定形式は、「まだ作っていない」であって「まだ作らなかった」ではない。(21) も同様である。

(20), (21) のように、連体修飾節で「完了」の意味を表す「タ」形を「テイル」形に置き換えた時、文が依然として成立するのは、「テイル」形も「完了」のアスペクトの意味を持っているからだと考えられる。主体動作・客体変化動詞は、主体の動作により客体に状態・位置変化が起こり、その変化が完了した後の結果が客体に残っている。この結果の継続を「テイル」形で表せるが、結果の継続がいつまで続くのか定かでないことから、最終的には変化後の客体の状態を「テイル」形で表していることになる。

形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形はテンス・アスペクトを表さないと述べたが、(20), (21) のように、「変化の完了」の段階を経て、最終的にその結果が状態として続く場合は「タ」形と「テイル」形の置き換えが可能になり、形容詞的用法と考えられる。

5.1.2.2 結果副詞との共起

「テイル」形がアスペクトを表さないということは、動作や作用を表さず、状態を表すことであるが、「状態」¹⁴には2つの種類が存在する。

¹⁴ 工藤 (1995) は、「結果継続＝状態パーフェクト」と規定している。工藤 (1995) の状態パーフェクトは、〈運動の後続段階〉を捉えているもので、既に運動が先行して起っていることを前提にしている。これを〈2次的状態〉としている。もう1つは、先行の運動性を切り捨ててしまった時には、形容詞的に、〈元々の状態＝1次的性質〉の意味で〈1次的状態 (性質)〉としている。

1つは、元々そういう状態にあるということで、状態の期限をまったく問題にしない、言わば「単純状態」である。「単純状態」は変化を伴わない状態である。

(22) 聳えている山

もう1つは、変化を伴う「状態」で、言わば「変化の結果の継続」である。

(23) 割れているお皿

ここで、すべての変化後の「状態」がアスペクトを表さないかというところでもない。上に述べた2種類の「状態」のように、開始時点と終了時点の問題にしない「状態」だけが形容詞的用法になると考えられる。「変化の結果の継続」か否かは、結果副詞との共起から判定できる。

仁田(2002)によると、〈結果の副詞〉とは、動きの結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の、主体や対象の状態のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴付けたものである(p.35)。

仁田は、その副詞が結果の副詞であることを確認する1つの方法として、次のような言い換えの可否を挙げている(p.51)。

「N {が/ヲ} + 結果の副詞 + V」 →
「V シタ結果, N ハ + 結果の副詞 + {ダ/ニナッタ}」

主体動作・客体変化動詞が結果副詞と共起した用例を見てみよう。

(24) 料理屋さんが顧客様に多い弊社としては余り細かく刻んでいる漬物は歓迎しないのです。(http://www.jyuichiya.co.jp/info5.htm)

(25) 微かな味噌汁の香りを漂わせた俺は、まだ微かに太陽が赤く染めている空を眺めてから、駅へと向かった。(ほっとする朝を)

(24)の波線を引いた副詞を、「V シタ結果, N ハ + 結果の副詞 + {ダ/ニナッタ}」で確認して見ると、「刻んだ結果, 漬物は細かくなった」が言えるので、「細かく」は結果副詞である。(25)も同様である。

「変化の結果の継続」は、先行動作や作用を前提としている。例えば、(24)は、「漬物を切る」という動作を前提とし、(25)は、「太陽」が動作主ではなく、意志的側面がない「もの」なので、こういう場合は、「太陽」の作用を前提としている。このように、主体動作・客体変化動詞は、主体の先行動作や作用により、客体に状態変化を引き起こし、その状態変化を客体に残していることで、「変化の結果の継続」の意味を表している。

(24)、(25)の「テイル」形を「タ」形に置き換えた時、文が依然として成立するのは、「変化の結果の継続」が「変化の完了」という段階を経て、最終的には客体の状態を表すことになるからである。工藤(1995)は、「変化の結果の継続」を〈二次的状态〉と呼び、〈結果継続=状態パーフェクト〉¹⁵と規定

¹⁵ 〈パーフェクト〉とは、〈ある設定された時点において、それよりも前に実現した運

している。

5.2 仮説

主体動作・客体変化動詞の「タ」形と「テイル」形が、形容詞的用法になる場合となれない場合の考察を通して、1つの仮説が立てられる。

仮説：

- ① 形容詞的用法になりうる動詞は、主体もしくは客体に結果を残す動詞でなければならない。
- ② 「タ」形と「テイル」形は、「変化の完了」という段階を経て「結果の継続」が続く場合に置き換えが可能になる。
- ③ 「結果の継続」が最終的に時間的束縛を受けない「状態」を表すことになると形容詞的用法になる。

5.3 主体変化動詞の場合

以下、上で立てた仮説が主体変化動詞と主体動作動詞にも当てはまるのか、それとも修正が必要なのかを検証する。

主体変化動詞は基本的に自動詞であり、主体の観点から変化を前面化し、あるいは、変化のみを捉えているものである。主体変化動詞は、主体の動作により主体に変化が生じる〈主体変化・主体動作動詞〉と人の意志により位置・姿勢に変化が生じる〈人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞〉、〈ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞〉に下位分類される（工藤 1995 : p.74）。3つの分類に属する動詞を**表4**にまとめた。

表4 主体変化動詞の下位分類

主体変化動詞	動詞
主体変化・主体動作動詞	・被る, 着る, 脱ぐ, 履く, 羽織る, 嵌める, まとう ・負ぶう, 抱える, 担ぐ, 抱く, 掴む, 握る, 持つ
人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞	・集まる, 移る, 近づく, 出掛ける, 離れる, 回る ・屈む, しがみつく, 座る, 並ぶ, 乗る, もたれる ・結婚する, 就職する, 卒業する, 入院する, 離婚する
ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞	・温まる, 枯れる, 腐る, 壊れる, 染まる, 倒れる ・秃げる, 曲がる, 焼ける, 割れる, 汚れる ・埋まる, 隠れる, 重なる, 下がる, 繋がる, 挟まる ・落ちる, 外れる, 離れる ・現れる, 生まれる, 生える

5.3.1 主体変化・主体動作動詞について

主体変化・主体動作動詞は、主体の動作により主体が変化するので、主体の観点から動作と変化の両方を捉えている。しかし、動作と変化の中からどちらが前面化されるかによって、アスペクト的用法か形容詞的用法かが決まる。

(26) 白っぽい着物を着た婦人が入ってきた。

動が引き続き関わり、効力を持っていること）を表している。

(27) 僕は運動靴を履いた足で、音を立てないように土手を降り始めた。

(26), (27) の「タ」形のテンス・アスペクト性を、過去を表す時間副詞と完了を表す時間副詞との共起から確認して見よう。

(28) 白っぽい着物を (*さっき/*もう) 着た婦人が入ってきた。

(29) 僕は運動靴を (*さっき/*もう) 履いた足で、音を立てないように土手を降り始めた。

(28), (29) が非文であることは、(26), (27) の連体修飾節の「タ」形がテンス・アスペクトを表さないことを説明している。この「タ」形を「テイル」形に置き換えて見ても文が依然として成立するので、この「タ」は、形容詞的用法の「タ」形であると考えられる。

(26), (27) を「テイル」形に置き換えた時、「テイル」形は、「動作継続」の意味ではなく、「変化の結果の継続」の意味として捉えられる。このことから、主体変化・主体動作動詞は、動作より変化を前面化していることが分かる。「変化の結果の継続」は、「2 次的状態」であるが、「2 次的状態」は、先行動作や作用が人間に認識されず、その後の段階である「変化の結果の継続」が続く状態が認識されやすい。この状態は、開始時点と終了時点が問題にされない「2 次的状態」であるため、形容詞的用法の「テイル」形だと考えられる。

5.3.2 人の意志的な(位置・姿勢)変化動詞について

このグループの動詞は、人が自らを変化させるべく行なう能動的・意志的動作を捉えているものである。

(30) 赤い羽根共同募金で集まったお金は福祉や被災地支援などに充てられる。(朝日新聞 2013.10.04)

(31) 復興支援のために全国から東北に集まっている人たちが飲食店や宿泊施設を利用することも踏まえた。(朝日新聞 2011.06.09)

(32) この春4年制大学を卒業した学生の就職率は61.6%だった。(朝日新聞 2011.08.05)

(33) 東京音大声乐科を卒業している黒柳が老いた元オペラ歌手を演じ、高橋昌也が演出を務める。(朝日新聞 2011.10.13)

(34) 自信をもって書いたが、ふと、前に座った人の答案が目に入ってしまった。(朝日新聞 2011.02.18)

(35) 講話では、遠くに座っている人にも届くように大きな声で話す。(朝日新聞 2012.01.29)

(30) ~ (35) の「タ」形と「テイル」形がアスペクト的用法か形容詞的用法かを判定して見よう。(30) と (32) は、「すでに集まったお金」「すでに卒業した学生」が言えることから、この「タ」形は「完了」の意味を表している。

(31) と (33) も「東北にすでに集まっている人たちが」「東京音大声乐科をすでに卒業している黒柳が」が言えることから、この「テイル」形も「完了」の意味を表している。

しかし、(34) と (35) は、「*前にすでに座った人」「*遠くにすでに座っている人」が言えないことから、この「タ」形と「テイル」形は、アスペクト的意味を表さないと考えられる。人の意志的な位置・姿勢の変化を表す主体変化動詞に含まれながら、こういう違いを見せる原因を考えて見よう。

「座る」と「卒業する」という動詞を比べて見ると、結果が主体に認識されやすい形で残っているか否かで違いがある。「座った／ている人」は「卒業した／ている人」に比べて、結果が残存しているので視覚的にも認識されやすい。つまり、(34) と (35) は、「2 次的状態」を表すので、形容詞的用法である。従って、「タ」形と「テイル」形の置き換えが可能である。結果が残存していると言え、(31) の「集まっている人」も同様であるが、アスペクトを表していながら、「集まった人」に置き換えられるのは、この理由からだと思われる。


以上、まとめると、人の意志的な位置・姿勢の変化を表す主体変化動詞の中にも、「変化後の結果継続」を表す動詞は、「2 次的状態」として形容詞的用法になりうるということが分かった。

5.3.3 ものの無意志的な(状態・位置)変化動詞について

このグループの動詞は、主体の意志的動作の側面が存在しない、ものの受動的変化を捉えているものである。

- (36) 舗装工事で内側車線の路面を掘り返すと、アスファルトの下から腐った木材がザクザクと出てきた。(朝日新聞 2012.10.02)
- (37) 屋根をはぐって見ると殆どが松で、このように腐っている木材も多く、釘は利きません。(Yahoo!ブログ)
- (38) 先ずは、落ちた葉っぱの掃除。放っておくと排水溝がつまる原因にもなるからね。(朝日新聞 2010.04.25)
- (39) 水は透き通っていて、底に落ちている葉っぱなどがはっきりと見えました。(朝日新聞 2005.10.10)

(36) ~ (39) は、主体変化動詞の中のものの無意志的な(状態・位置)変化動詞の「タ」形と「テイル」形である。このグループの動詞の「タ」形は、変化過程の終了を表し、「テイル」形は変化後の結果成立の継続を表す。(36) を例に取ると、「腐った木材」は、木材が腐る過程は必ずあるはずで、その過程に要する時間も長いはずだが、それが主体に認識されず、変化過程の終了が前面化される。しかし、(38) は (36) と違う。葉っぱが地面に落ちるまでの過程に要する時間が「腐る」過程に要する時間より短い。従って、変化の過程に要する時間の長さや変化のプロセスには関心が無く、変化後の結果成立が焦点化される。この動詞グループの「テイル」形は、変化が成立した後から変化の結果が終了するまでを表している。

以上、主体変化動詞の 3 つの下位分類について仮説の検証を行なった。主体変化動詞の「タ」形と「テイル」形が表す意味を図で示すと、 1 のようになる。

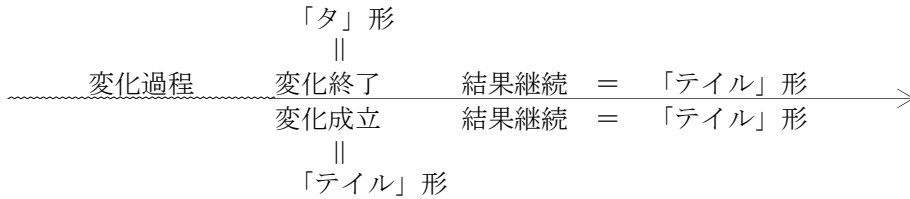


図 1 主体変化動詞の「タ」形と「テイル」形が表す意味

図 1 から主体変化動詞の「タ」形は、変化の終了を表し、「テイル」形は、変化の成立を表すことが分かる。変化が終了した時点で変化が成立したことになるが、どちらが前面化されるかで「タ」形と「テイル」形が使い分けられていると考えられる。変化の終了が前面化される場合は「タ」形が使われ、変化の成立が前面化される場合は、「テイル」形が使われると考えられる。変化の終了と変化の成立は、実際には同じ事態を表しているが、その後の結果継続の状態は「2 次的状態」として理解される。主体変化動詞の「タ」形が「テイル」形に置き換えが可能なことも、変化が終了した時点があるにもかかわらず、それが主体に認識されにくく、後の結果継続の状態が認識されやすいことと関係すると考えられる。

以上、5.3 の考察を通して、仮説が主体変化動詞にも当てはまることが分かった。

5.4 主体動作動詞の場合

主体動作動詞は、自動詞も他動詞も属していて、運動の変化の側面には無関心に、動作の側面のみを捉えている動詞である。工藤は、主体動作動詞を 6 つに下位分類している（工藤 1995 : pp.75-76）。

表 5 主体動作動詞の下位分類

主体動作動詞	動詞
主体動作・客体動き動詞	・動かす, 振る, 飛ばす, 流す, こぐ, 回す, 揺らす, 鳴らす, 燃やす
主体動作・客体接触動詞	・押す, 擦る, 触る, 殴る, 踏む, 揉む ・かじる, 吸う, 食べる, 舐める, 飲む ・会う, 訪問する, 待つ, 見送る
人の認識活動・言語活動 ・表現活動動詞	・嗅ぐ, 聞く, 覗く, 見る, 比べる ・言う, 書く, 答える, 話す, 読む ・歌う, 踊る, 弾く, 舞う
人の意志的動作動詞	・遊ぶ, 歩く, 泳ぐ, 走る, 通る, 向かう
人の長期的動作動詞	・営む, 通う, 暮らす, 住む, 勤める
ものの非意志的な動き (現象) 動詞	・動く, 飛ぶ, 流れる, 泣く, 回る, 笑う ・輝く, 流行る, 光る, 響く, 吹く, 降る

以下、主体動作動詞にも上で挙げた仮説が当てはまるかどうかを検討する。

- (40) 大雨になると赤磐市の山間部で降った雨が砂川に流れ込み、一気に増水する。(朝日新聞 2013.09.19)
- (41) 土砂崩れは、11 日から降っている雨によるものとみられる。(朝日新聞 2012.07.13)
- (42) 山高帽をかぶった小太りの現場監督のすぐ前を、手押し車を押した二人の男がぬかるんだ地面に組みあげられた足場に向かって進んでいる。(ミスターX)
- (43) 彼は運転手のあとから道路をまたぐ歩行者用の橋を渡り、スーツケースを山のように積み上げた手押し車を押しているインド人の大家族をよけた。(死の変奏曲)

(40) ~ (43) は、主体動作動詞の「タ」形と「テイル」形である。(40) の「タ」形は、「完了」もしくは「過去」の意味を表し、(41) の「テイル」形は、「動作の継続」の意味を表す。

しかし、主体動作動詞「押す」の(42)と(43)は、少し違う振る舞いをしている。「降る」は、「タ」形と「テイル」形の置き換えが不可能であるが、「押す」の場合は、置き換えが可能である。(42)の「手押し車を押した二人の男」を「手押し車を押している二人の男」と言えなくはないし、(43)も「手押し車を押しているインド人の大家族」を「手押し車を押したインド人の大家族」と置き換えることができる。

ここで、同じ主体動作動詞でありながら「押す」がほかの主体動作動詞とどこが違うのかを考えて見る。ほかの主体動作動詞は動作が終了した後結果を残さないが、「押す」は結果を残している。(42)、(43)の場合は、手押し車が前に進んだ結果が距離の移動として残っているはずである。ここから、主体動作動詞の中でも結果が認識されやすい形で客体に残る動詞は、形容詞的用法になりうるということが分かる。

客体に結果を残さない主体動作動詞は、動作の側面だけを捉えていることから、「タ」形は「完了」または「過去」の意味と捉え、「テイル」形は「動作の継続」の意味と捉える。従って、「タ」形と「テイル」形の意味が重なる部分がないので置き換えが不可能である。

以上、形容詞的用法になる時とならない時がある非典型的な形容詞的動詞グループについて、実例を基に仮説の妥当性を考察した。結果、〈主体動作・客体変化動詞〉と〈主体変化動詞〉は形容詞的用法になりやすいが、〈主体動作動詞〉は客体に結果を残す動詞以外は、形容詞的用法になりにくいことが分かった。これは、上で挙げた「形容詞的用法になりうる動詞は、主体もしくは客体に結果を残す動詞でなければならない」という仮説が妥当であることを説明している。

6 おわりに

「タ」形と「テイル」形が連体修飾節に現れた時、アスペクトを表す場合と表さない場合があることから、本稿では、動詞を大きく3分類した。連体修飾節で必ず形容詞的用法になる動詞を「典型的な形容詞的動詞」とし、形容詞的

用法にならない動詞を「状態動詞」とした。それから、形容詞的用法にもアスペクト的用法にもなる動詞を「非典型的な形容詞的動詞」とした。「非典型的な形容詞的動詞」をさらに〈主体動作・客体変化動詞〉〈主体変化動詞〉〈主体動作動詞〉に下位分類し、「非典型的な形容詞的動詞」の中から形容詞的用法になりうる動詞に共通する特徴を考察した。結果、次のようなことが明らかになった。

1. 〈主体動作・客体変化動詞〉と〈主体変化動詞〉は形容詞的用法になりやすい。これは、主体の変化であれ客体の変化であれ、変化を含意している動詞は、「変化の結果の継続」という開始段階と終了段階が欠けている〈二次の状態〉を表すことができることから、形容詞的用法になりやすいと考えられる。

(44) 白っぽい着物を着た婦人が入ってきた。(寺村 1984 : p.199)

(45) まだ微かに太陽が赤く染めている空を眺めてから、駅へと向かった。
(ほっとする朝を)

2. 〈主体動作動詞〉は形容詞的用法になりにくいだが、「押す」という動詞は形容詞的用法の用例が存在した。これは、〈主体動作動詞〉の中にも結果が主体に認識されやすい形で残る動詞は形容詞的用法になりうると考えられる。

(46) 私の前にはベビーカーを押したご家族が歩いていました。(Yahoo!ブログ)

3. 「非典型的な形容詞的動詞」の形容詞的用法は「タ」形と「テイル」形両形式が使われる。変化の終了が前面化される場合は「タ」形が使われ、変化の成立が前面化される場合は「テイル」形が使われる。同じ事態を2つの異なる形式で表していることは、主体が客観的事態のどの部分を焦点化して捉えているかという認識が関わってくると考えられる。

(47) 先ずは、落ちた葉っぱの掃除。放っておくと排水溝がつまる原因にもなるからね。(朝日新聞 2010.04.25)

(48) 水は透き通っていて、底に落ちている葉っぱなどがはっきりと見えました。(朝日新聞 2005.10.10)

最後に、今回は「押す」のような形容詞的用法になりうる主体動作動詞に関する考察が十分ではなかった。「押す」のほかにもこのような動詞が存在するかもしれないので、更なる検討が必要である。今後の課題としたい。

参考文献

金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」、田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版。

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, に収録)
- (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X (文学 4). (金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, に収録)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- (2010) 『語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房.

Result Continuance in Japanese Noun-Modifying Verbal Clauses

CAI Mei-hua

Several Japanese verbs have both adjectival and aspectual uses. The purpose of the present paper is to identify some properties shared by these verbs, focusing on their remaining results of change. I named these verbs atypical adjectival verbs, and classified them into three types: (I) verbs of subject's action and change in object, (II) verbs of change in subject, and (III) verbs of subject's action. I observed I-verbs, and made a hypothesis on them that each II-verb having an adjectival use must be the one leaving some effect of the action it denotes on its subject or its object. Then I verified my hypothesis by applying it to I- and II-verbs. The result I achieved is the following:

1. I- and II-verbs are allowed to be used as adjectives. This is due to the fact that each verb implying “change” is able to express a secondary “state” as the remaining result of change, whether it is effected on its subject or object.
2. III-verbs are not readily allowed to be used as adjectives. It should, however, be noticed that verbs such as “*osu*” (push), the result of whose action remains as recognizable to its subject are allowed as adjectives.
3. The adjectival uses of the atypical adjectival verbs are allowed both in *ta-* and *teiru-* forms. These two different forms are supposed to depend on which part between subject and object is to be brought in focus.

Key words: adjectival use, completion of action, remaining result of change